

自分の仕事を考えてみた



今年も七夕の季節がやって来た。30歳になる私の娘は幼少の頃から障害者で、養護学校・特別支援学校と、更に現在も訪問型の介護を含め4か所の施設にお世話になっている。そのおかげで妻も私も各々のお寺の仕事を続けさせていただいている。そんな施設で風にゆれている短冊には、「今年中に10歩歩けますように」だとか、他所とは違う一直線なお願い事が記されている。初めて見た時にあまりの一直線さに釘付けとなった。うまく表現できないのだけれど、この世で最大限謙虚な願いでありながら奇跡が起こりそうな不思議な雰囲気がある。パラリンピックに出場する選手とか、人気者になってテレビに出ている乙武さんのような人ではそんな短冊は書けないと思う。いろいろな方の温かいお世話をうけて、障害者は障害者らしく、且つ悠々と生きている娘がそんな風に呟いた気がする。

いつの時代も、「願う」人が存在すればそれを受け止め寄り添い「祈る」人が必要になる。いみじくも私の仕事はやはり宗派に所属する僧侶の前に「祈る人」であり、毎年施設の七夕の短冊を見ては「謙虚さ」がかけていないか確かめている。「祈る力と集中力！」このことにおいて私より妻の方が勝って

いることは承知している。また過去、祈る仕事をしている人と出会い、自身の祈る力の弱さを何度も痛感した。そういう力は生まれ持った才能かも知れない。東日本大震災前に、現在の天皇陛下が皇太子殿下の時、秋篠宮殿下を次の天皇にしようという気運が一部で沸き上がった。悠仁様が誕生し、また雅子様が病気で公務を休みがちという状況が重なったことが背景にあったのかも知れない。こんなこと自体由々しきことなのだが、しかしその時、長年現陛下にお仕えをしてきた女官が、「皇太子殿下は、祈る力は歴代の天皇のなかでもずば抜けたお力をお持ちです」と毅然と訴えたという。天皇陛下のお仕事の一つに神職として午前2時には身を清めて国民の為に祈っておられる。それがどんなに大変なお仕事であろうと私は思う。私の知人の神主さんは、午前2時に寝坊して何回も布団ごと投げ飛ばされていると聞いたことがある。祈る人は謙虚さを忘れてはいけない。祈ってたまたま良い結果が続いたとして傲慢さが出る。そうすると祈りの後にあの独特の疲れを感じなくなる。どんどん祈りを続けて挙句のはて命を取られた人を知っている。

何年か前に疲れてしまい体が動かなくなった時に知人の医師を訪ねた。その医師は、「俊徳丸さんは人の為に毎日祈るけど、自分の為に祈ったことはないからねえ。」と言ってやさしく背中をさすってくれた。目から涙が溢れたが、私は初めて褒められたのだらうなあと勝手に思った。その医師の診察室には御先祖のお佛壇と神棚が祀ってあるぐらいだから、医師という前にこの人も「祈る人」だと思う。これから盂蘭盆施餓鬼会。ひたすら祈る楽しい時間が始まる。

俊徳丸